

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00169

研究課題名（和文）フィレンツェ美術にみるダンテ『神曲』の視覚化 - 彼岸の測量と地理学を中心に

研究課題名（英文）Visualization of Dante's Divine Comedy in Florentine Art

研究代表者

石澤 靖典 (Ishizawa, Yasunori)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20333768

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：15～16世紀のイタリア人文主義におけるダンテ『神曲』の註解と、同時代のルネサンス美術の関連性を、彼岸の三界 地獄、煉獄、天国 の表象を中心に検証した。とりわけ、この時代のダンテ学者による地獄、および煉獄の地理学的・測量学的研究が、同時代のボッティチェッリやブロンズイーノら、ダンテの彼岸イメージを視覚化した美術家とどのような思想的関心を共有していたかを検討し、そのような動向の背後に、ダンテを文化的象徴として称揚する都市の論理が存在していたこと、また註解版『神曲』刊行にまつわるフィレンツェ-ヴェネツィア間の対抗意識が作用していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ダンテ『神曲』で詳細に描写された地獄や煉獄の構造が、15～16世紀の彼岸にまつわる視覚表象に何らかの影響を与えたことはこれまでも指摘されてきた。しかし15世紀後半から16世紀前半にかけての人文主義文化の中で、都市の文化的覇権にまつわる闘争という観点からそれら一連のダンテ再評価の流れを再構築し、さらに美術史的な展開と関連付ける試みはわずかだったといえる。本研究ではランディーノの『神曲』註解で最初に提示され、画家によって視覚化された彼岸イメージが、その後のルネサンス文化の中でどのように継承あるいは修正されたかを、幅広い歴史的文脈において捉え直そうとしており、その点に学術的意義があるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study explores the relationship between 15th-16th century Italian humanist commentaries on Dante's Divine Comedy and contemporary Renaissance art, focusing on the representation of the three afterworlds - Hell, Purgatory, and Heaven. In particular, it examines the ideological interests shared by Dante scholars of the time in the geographical studies of Hell and Purgatory and those of contemporary artists such as Botticelli and Bronzino, who visualized Dante's afterworld images. It clarifies that behind such trends was the logic of the city that glorified Dante as a cultural symbol, and the rivalry between Florence and Venice surrounding the publications of the commentary editions of the Divine Comedy.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ルネサンス 神曲 ボッティチェッリ 地獄図 煉獄

1. 研究開始当初の背景

15、16世紀のイタリア・ルネサンス美術においてダンテ『神曲』の重要性は、夙に指摘されるところであるが、それはダンテの詩編が絵画や彫刻作品の主題としてしばしば取り上げられてきたということだけでなく、後世の人文主義者によるダンテ註解書が、文学を超えて宗教や哲学、科学などさまざまな学問領域におよぶ広範囲な問題群を提起し、それらが美術制作の現場と相互影響の関係にあったことをも意味する。たとえばアンドレ・シャステルは『ロレンツォ豪華王時代の芸術と人文主義』(1959)の中で、ロレンツォ・デ・メディチ(1449-92)が実質的な支配者となったフィレンツェにおいてダンテに対する関心が、知的エリートのみならず、一般市民レベルにまで広がりを見せ、「ダンテ崇拜」ともいうべき様相を呈したことを指摘している。そこではダンテが詩人としてのみならず、哲学者として、あるいは政治思想家、神学者さらには天文学者や地理学者としても扱われ、『神曲』や『帝政論』などの主要著作が多角的に再解釈されたのである。

15~16世紀のこうした傾向においてダンテは、イタリアにおけるフィレンツェの文化的覇権の象徴と目され、人文主義者や美術家の密接な協力関係のもと、その百科全書的な世界観が構築された。こうした知的潮流とイタリア・ルネサンス美術の関係についてはこれまでもしばしば分析が試みられてきた。例えば、P. ドライヤー(1988)は、ポッティチェッリの『神曲』挿絵、とりわけその冒頭に付された「地獄の断面図」(ヴァチカン図書館)が同時代の建築家アントニオ・マネッティによるダンテ解釈と関連性があったことを指摘している。

しかし従来、こうした人文主義者によるダンテの自然科学的解釈と同時代美術との関連については個別の作品研究において言及されることが多く、シャステルが最初に提示したような「ダンテ崇拜」ともいうべき大きな文化潮流の実態については今なお明らかにされていない点が多い。とりわけ、この問題にかかわった人文主義者の多くが、美術アカデミーやフィレンツェの「芸術家列伝」の成立に寄与する立場にあった点は重要である。彼らの「フィレンツェ美術史」の確立がダンテ研究にもとづく「フィレンツェ文化の覇権」の示威運動と連動していることは明らかである以上、この潮流にはカンパニリズム(自国中心主義)に基づく国家称揚のイデオロギーが介在している。ダンテ註解にまつわるさまざまな論争も、純学問的な関心のみからおこなわれたものではなく、イタリア半島の国家的係争関係のなかで成立したものであることに留意する必要がある。したがってこうした視点を加え、ダンテの地理学的考察にまつわる研究内容により広い歴史的文脈を与えることが今後の課題として残されている。

2. 研究の目的

本研究は以上のような研究状況にもとづきながらも、『神曲』に対する地理学的アプローチとカンパニリズムにもとづく都市の論理をより多角的かつ包括的に検証することを目的とする。そのさい、単にダンテ批評の言説が美術作品にどのような方向付けを与えたかといった単純な影響関係を指摘するのではなく、美術作品における彼岸のイメージならびに美術家の知的関心が、逆にそうした人文主義者による『神曲』研究に大きな進展をもたらした点、すなわち双方向的なアプローチからこの時代のダンテ再評価の実相と展開を明らかにしようとするところに本研究の特徴と独自性がある。

こうした視点をもとに、ダンテという文学的事象を震源としつつも時代の美術や社会全体を覆う文化運動となった歴史のダイナミズムを検証することが本研究の最終目標である。

3. 研究の方法

検証の中心となるダンテ文献として、15世紀に関してはクリストフォロ・ランディーノのダンテ『神曲』註解書(フィレンツェ、1480年刊行)、16世紀に関してはヴェルテッロの註解書を取り上げる。前者はフィレンツェで初の『神曲』印刷本として広範囲の流布を見たという理由だけでなく、その序文において、「フィレンツェ美術家列伝」ともいうべき小論や、アントニオ・マネッティの研究にもとづく地獄の測量にまつわる考察を紹介している点においても注目される。一方、ヴェルテッロ版『神曲』は1544年にヴェネツィアで出版され、ランディーノに対する明白な対抗意識に基づいた注釈ならびに、地獄および煉獄の地理学的研究を付している点が特筆される。

本研究はこれら二篇の註解書を縦軸に据えながら、以下の3点を明らかにする。

(1) ランディーノ版『神曲』註解とその視覚化の伝統

ランディーノによる註解書が15、16世紀の画家によって使用された『神曲』テキストの標準だったことはよく知られている。新プラトン主義的な色彩の強いその解釈に対しては、ポッティチェッリやミケランジェロらの作品との関連性がしばしば指摘されてきた。本研究ではとりわけ、ランディーノ版の序文にみられる「地獄の場所、形体、大きさ、および巨人とルチフェロの背丈について」(*Sito, forma e misura dello 'inferno e statura de' Giganti e di Lucifero*)と題する論考に焦点を絞って考察を進めることとした。

(2) ヴェルテッロ版『神曲』註解と文化的カンパニリズム

一方、1544年にヴェネツィアで刊行されたヴェルテッロ版『神曲』はランディーノ版の乗り越えを図る目的で編纂された点が注目される。とりわけその序文においてヴェルテッロは、ランディーノが提示した地獄の大きさに誤りがあったとする議論を展開しており、ここにランディーノを中心とするフィレンツェのダンテ解釈の伝統とヴェルテッロに端を発するヴェネツィアのダンテ研究との対立図式が先鋭化する。1564年にはランディーノ版とヴェルテッロ版の比較対照を可能とすべく、双方を収録した合併本(サンソヴィーノ版)が刊行されるなど、両者の『神曲』解釈の相違は決定的だった。本研究ではこうした16世紀の新たなダンテ評価とフィレンツェ・ヴェネツィア間の応酬が際立ったカンパニリズムとの関係に着目し、考察をおこなう。

(3) ダンテ『神曲』にもとづく彼岸の表象

本研究では、15～16世紀にかけてのダンテ研究の推移が、地獄と煉獄および天国の視覚的描写に変化をもたらしたことを明らかにする。たとえば、ブロンズイーノが1532年頃に制作したとされる《ダンテ》像(フィレンツェ、個人蔵)には、煉獄山が会場にそびえる様が描写されており、そのディテールは同時代のダンテ研究の成果と関連付けられると思われる。このようなダンテ註解の歴史と美術作品の対応を具体的に検証しつつ、ランディーノ版からヴェルテッロ版にいたる彼岸の地理学的考察の変化において視覚芸術が果たした関与の度合いと実相を明らかにする。

4. 研究成果

(1) クリストフォロ・ランディーノ註解版『神曲』とその視覚化の伝統については、同書序文で紹介された数学者兼建築家のアントニオ・マネッティによる「地獄の測量研究」と、そこから派生したと思われる美術上の地獄イメージ、すなわちサンドロ・ポッティチェッリの『神曲』挿絵(ヴァチカン図書館)とジュリアーノ・ダ・サンガッロによる「地獄の断面図」素描(ローマ、ヴァリチェッリアーナ図書館、Ms.Z.79.A)を比較検証した。もともと「地獄の測量研究」はランディーノが友人でありブルネッレスキの弟子でもあったマネッティから教示された論説を紹介するというかたちをとっており、ダンテの詩句に時折ちりばめられる空間的・時間的位置関係に関する言及から、地獄の形状と大きさ、地勢を数学的・地理学的に割り出そうとする試みである。ポッティチェッリによる「地獄の断面図」挿絵やジュリアーノ・ダ・サンガッロの素描は、従来、このテキストを視覚化したものであることが示唆されてきた。しかし本研究においてマネッティの実測結果と素描の形状を比較した結果、両者の間には必ずしも完全な対応は見られないことが確認された。マネッティの地理学的考察はむしろ、同時代の人文主義者フランチェスコ・ベルリンギエリの著作『地理学の七日間』(1482)に見られるプトレマイオス地理学再興とも連動する、未知の外的空間の視覚化に連なる関心であったと考えられる。一方、ポッティチェッリおよびサンガッロの断面図は、同時代の銅版画家フランチェスコ・ロッセッリの地図製作と同一の指向性を持つことが推定される。ロッセッリは《ロッセッリ=コンタリーニ図》とよばれる扇形の世界地図や《ロッセッリ図》とよばれる楕円形の世界地図、フィレンツェ都市景観図のなどでよく知られる他、ポッティチェッリ作品を原画とする銅版画も数点残している。両者の緊密な関係や知的関心の共通性を考えるならば、ポッティチェッリが地獄の断面図を、地理学者とも称されたロッセッリとの共同制作のなかで発想を得た可能性が指摘される。

ポッティチェッリとロッセッリとの関係性については、すでに小論(文献)で、主に神話画や都市景観図の観点から検討したところであるが、本研究ではさらに地獄の断面図を中心とする地図製作的な側面から、改めてその結びつきを検証した。

加えて、こうした地獄の視覚化および、その階層構造の詳細な図解は、フィレンツェの人文主義者ジロラモ・ベニヴィエニが1506年に刊行した『偉大なる詩人ダンテ・アリギエリが語る地獄の位置、形状、大きさについてのアントニオ・マネッティの対話』と題する論考で、7点の木版挿絵とともにさらに精密さを増すこととなる。これらの系譜を比較検証すると、ポッティチェッリやサンガッロの断面図はその後の地獄表象の方向性を大きく決定づける役割を果たしたことが結論として導き出される。

(2) ヴェルテッロ版『神曲』をもとに、註解者の思想基盤と同書に付された87点にのぼる木版挿絵を検討した。まずヴェルテッロ版の成立背景として15～16世紀のヴェネツィアにおけるフィレンツェ文化への対抗意識が大きな影響を及ぼしていたと考えられる。フィレンツェのダンテ崇拜の潮流に対し、より抒情性を尊ぶペトルカ主義が標榜されたのは端的な例であるが、それだけでなく、『神曲』の科学的解釈に関しても反ランディーノ説が唱えられるようになったことが注目される。たとえばベンボは自ら校訂した1502年のアルド版『神曲』に続く1515年の第二版において、ベニヴィエニを凌駕する詳細な地獄図を掲載している。続くヴェルテッロは『新註解付神曲』を1544年にヴェネツィアで刊行し、ランディーノらフィレンツェ勢に対する異論として新たな測定結果を多数の図解入りで説明した。

ヴェルテッロの註解とその後のフィレンツェのダンテ研究の動向を相互に比較すると、ヴェルテッロによってフィレンツェにもたらされた彼岸の地理学的研究の変革は、地獄の計測以上に、煉獄の地勢に関してであることが判明した。1481年のランディーノ版では、地獄の測量という科学的なまなざしが必ずしも煉獄全体にまでは及ばず、新プラトン主義的な意味付けに多くの説明が費やされているのに対し、ヴェルテッロ版においてはアリストテレス的色彩の強い、現実的、具体的な煉獄像が提示されている。とりわけ冒頭の「煉獄の描写(Descrizione del Purgatorio)」では、煉獄の規模や形状、距離などが詳細な数値とともに提示されており、興味深

い。一方、フィレンツェ勢もまたこのヴェルテッロ版の出版に触発され、より具体的なデータにもとづく彼岸解釈を次々に提起することになる。とくにヴェルテッロ版の2年後にドナート・ジャンノッティが執筆した『ドナート・ジャンノッティの対話—ダンテは地獄および煉獄をめぐるのに幾日かかったか』は、地獄篇と煉獄篇を素材に、ダンテの彼岸旅行の行程を時系列の点から検証したものであり、ヴェルテッロの註解本出版直後という執筆時期からして、ここにヴェネツィア勢に対する何らかの意識を見ることが出来る。またこの『対話』の中心的な発言者としてミケランジェロが登場している点は、こうした人文主義者の関心に、美術家が大いに関与していたことを証している。

以上の検討から、ヴェルテッロ版『神曲』が契機となり、フィレンツェ-ヴェネツィア間の文化的覇権をめぐる対抗意識が顕在化し、その潮流において同時代の美術家による彼岸世界の描写が研究成果の視覚化という点において大きな貢献をなしたことが確認された。

(3) フィレンツェの画家ブロンズイーノが1532年頃に制作したとされる《ダンテ》像について、画中の煉獄山の表象を同時代のミケランジェロや人文主義者の関心から検討した。本作品はフィレンツェの銀行家バルトロメオ・ベッティーニにより、自邸の一室のリュネッタを飾る絵として委嘱されたものであり、このとき同じ部屋を飾るための絵画としてさらに発注された神話画《ウェヌスとクピド》(現フィレンツェ、アカデミア美術館)は、ミケランジェロの構想によるものであることが知られている。ブロンズイーノ作品には、岩場に座るダンテの右奥に煉獄山のイメージが挿入されている。その形状はきれいな三角形とともに七つの環道がリアルに描き分けられ、詳細かつ立体的である。またこの作品にはもう一点、1541年以降の成立になる工房作が存在するが、こちらではより輪郭のきわだった、精緻な細部表現が観察される。こうした明確で具体的な煉獄のイメージは、同時代のベネデット・ヴァルキが、「煉獄篇」の第10歌と第12歌を例に、ダンテとミケランジェロの雄弁な表現力を称賛した一文を想起させるものである。加えてヴァルキは、ダンテ学者である友人のルカ・マルティーニとともに、地獄と煉獄の形状や実寸を研究していたこと、またそのマルティーニ自身が研究用に地獄および煉獄の立体模型を製作していたことが知られている。これらの事実からは、16世紀の美術家と人文主義者が、彼岸世界の空間化において、相互影響のもとに探求を深める関係にあったことが明らかとなる。ミケランジェロ周辺の人文主義者によるダンテ受容と美術の関係についてはすでに研究代表者が文献において示唆していたが、本研究において図像の成立背景をより具体的に浮き彫りにできると思われる。その内容は未公表であるが、ヴァルキのダンテ研究との関連性をより具体的に裏付けたうえで、今後論考を発表する予定である。

(4) 他の科学研究費補助金(基盤研究(B))「東北地方における写真文化の形成過程と視覚資料の調査研究」(課題番号16H0336402)の研究分担者として携わっている、明治から昭和初期における東北における写真文化の発展と都市イメージに関する調査研究をフィードバックし、比較文化的視点から、都市文化の表象を分析する試みに取り組んだ。その成果として、本研究の課題継続期間に成果報告書を公刊した(文献)

以上により、ダンテを自国の芸術家として再評価しようとするトスカーナのカンパニリズムが、図像学の領域における新たな彼岸イメージの創出に繋がっていたこと、またそれがミケランジェロを中軸とするフィレンツェ美術と連動する文化運動であったとの見解を得るに至った。

<引用文献>

石澤靖典「ボッティチェッリの後期作品における都市景観 — その図像源泉と思想背景 —」
『鹿島美術研究』第26号、2009年、644 - 660頁

石澤靖典「「ボッティチェッリの『神曲』素描とフィレンツェ人文主義」『美術史学』(東北大学文学部美術史学研究室) 第25号、39 - 67頁

石澤靖典・森岡卓司編『大正・昭和期における東北の写真文化』山形大学附属映像文化研究所、2021年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石澤靖典・森岡卓司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山形大学人文社会科学部	5. 総ページ数 272
3. 書名 大正・昭和期における東北の写真文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------